

『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』

——顔真卿の行書における「草稿」と「完成」——

宮崎 洋一

はじめに

書に現れた作品制作の意図や行書に対する美意識を探るとともに、それが、後にどのようなように受け取られていったかを明らかにしようとするものである。

一、これまでの研究と分析の視角

一つの芸術作品を、その作者がどのような意図をもって制作したかということは、その作品を鑑賞する者にとつてたいへん興味深いことではあるけれども、実際には、芸術家が自分自身の作品の制作意図やその作品に対する評価を書き残すことは非常に稀である。まして、それが死後一〇〇年以上を経た顔真卿の場合となると、今回本稿が取り上げようとする『争坐位稿』や『郭氏家廟碑々陰』について書き残されたものは全く無い。

本稿は、現在残っている顔真卿の『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』の比較分析を通して、この時期の顔真卿の行

今回取り上げる『争坐位稿』は、広徳二年十一月、^①顔真卿が五十六歳の時に、式典の席次を乱したことに抗議して郭英乂に宛てた一二〇〇字を越える長文の書簡の草稿である（抹消された字で判読可能な字を含む）。書簡の草稿であるから、おそらく清書されたものであらうと思われるが、現在はこの草稿しか残っていない。全体の約二割に当たる二四〇字ほどが行間に加筆されるなど、訂正の多い草稿ながら、古くから多くの人々によって数ある行書の中でも傑

作の一つと考えられてきた。

これに対して、同年同月に立碑された『郭氏家廟碑』は、安史の乱平定の勲功第一にあげられた郭子儀が、父敬之の廟に建てた碑で、時の皇帝、代宗御題の額を戴き、文・書ともに顔真卿の手になるものである。今回取り上げる碑陰には、郭氏の子孫の榮進ぶりが非常に行書的な楷書で書かれている。

本稿は、この『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』の二つの作品に、さらに王羲之の行書を加えて比較しようとするものであるが、これまでの『争坐位稿』を扱った多くの論文の中で、特に王羲之の行書との比較を最初に行ったのは、杉村邦彦氏の「顔真卿は王羲之をどのように受けとめたか」⁽²⁾である。杉村氏は『争坐位稿』と王羲之の行書を集めた『集王聖教序』とを一字一字比較して、王羲之と全く区別が出来ないものと多少顔真卿の個性が現れたものが、『争坐位稿』全体の八十パーセント以上を占めると結論した。顔真卿の平生の書を窺うことのできる『争坐位稿』を材料に用いて、顔真卿の行書が、一般に考えられているよりもはるかに王羲之の影響を強く受けていたとするこの結論は、本稿においても十分に承け継いでゆかなければならぬものと考ええる。確かに、『争坐位稿』の中で『集王聖教序』に全く用例のない字は、『争坐位稿』全体の約三割強に当たる三九〇字余りにのぼるし、さらにこの他に『集王

聖教序』に用例はあっても字体や崩し方が異なるために、実際には『争坐位稿』と比較できないものもある。杉村氏がこれらの字をどう判断したかについて、全く言及していない点はこの論文の問題として残るけれども、王羲之の字を約二五〇〇〇字収録する『王羲之大字典』⁽³⁾によって、『集王聖教序』だけでなく他の多くの王羲之の行書と比較するならば、杉村氏の結論はさらに補強されることになる。⁽⁴⁾

一方、『郭氏家廟碑々陰』は、その書風が非常に典雅であるためか、逆に顔真卿の書の中では大きな注目を集めず、王羲之の行書とを比較した研究はない。しかし、『争坐位稿』との比較は外山軍治氏によって行われ、⁽⁵⁾わずか数字の例ではあるが、『郭氏家廟碑々陰』と『争坐位稿』の類似性が指摘されている。

この杉村・外山両氏の考察から、すでに『争坐位稿』、『郭氏家廟碑々陰』、王羲之の行書の類似性が想像されることは明かであるけれども、この『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』を直接比較することには、以下に指摘するようないくつかの問題が存在する。

第一の問題は、『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』とでは、本来書かれた材料が異なるということである。書簡の草稿である『争坐位稿』は本来は紙に書かれたものである⁽⁶⁾のに対して、『郭氏家廟碑々陰』は始めから石に刻まれることを目的として書かれたはずである。『郭氏家廟碑』が

実際にどのような工程で立てられたかは明かでないが、たとえ一度紙に書かれたとしても、石碑に刻まれるという前提がその制作態度や書表現に大きな影響を与えていると思われる。事実、『郭氏家廟碑々陰』の一部には、始筆などに非常に装飾的な表現が存する。

第二は、『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』とは、書体がやや異なるということである。『争坐位稿』は主に行・草書で書かれているのに対して、『郭氏家廟碑々陰』の書体は「書写体的楷書」とも呼べるもので、中には完全な楷書と思われるものも含まれている。その上、この二つの作品は書かれた内容が全く異なるため、残存する字数の割に共通する字が少ない。両方の作品に共通し、しかも『郭氏家廟碑々陰』が行書的な字であるものを抽出することは、非常に困難である。

第三は、すでに飯島太千雄氏が指摘した通り、現存する刻本の『争坐位稿』が、本来の紙本の書風をどれだけ忠実に具有しているかということである。真跡と思われる『争坐位稿』は、上下二つに分断されたものが北宋末期まで伝わっていたことが、『宣和書譜』巻三に著録されていることから明かとなるが、現在は伝わっていないので、『争坐位稿』は刻本によって見る以外にない。この刻本自体は、米芾『書史』などによれば北宋後期に作られ、清朝後期の王昶の『金石萃編』巻九十三には七種類が著録されている

が、現在は「関中本」と呼ばれる系統の刻本がほとんどである。今回は、この「関中本」の中でも最も良いと思われる高島槐安旧蔵（現東京国立博物館蔵）本を用いたけれども、この拓本でも一部には線の弱さが感じられる。

しかし、上述のような問題の存在を考慮に入れても、なお本稿が『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』を比較しようとする理由は、この二つの作品の、作品としての性格の違いにある。

そもそも『争坐位稿』が「草稿」であるという事実は、一方で『争坐位稿』が顔真卿の巧まざる書の美しさを備え、平生の書の姿を窺うことができるという特徴につながってゆく。事実、これまでの先学の考証もこの点を明らかにしようとする視角でなされてきたものであった。しかし、その一方で「草稿」であるということは、『争坐位稿』の中には顔真卿自身が意識的には求めていなかった表現が残っているのではないか、という可能性をも想像させる。これに対して、『郭氏家廟碑々陰』は顔真卿の手によって「完成」された作品であるから、この『郭氏家廟碑々陰』の方がより顔真卿自身の行書における制作意図を具現しているのではないかと思われる。

「草稿」である『争坐位稿』と「完成」作品である『郭氏家廟碑々陰』を比較することによって、顔真卿によってどの部分が意識的に表現された部分で、どの部分が無意

王羲之

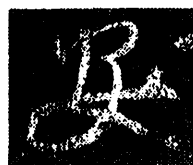
『郭氏家廟碑々陰』

『争坐位稿』

A

B

C



識のうちに表現された部分なのかを明らかにできるはずである。

次節では、このような視角に基づいて、『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』に、さらに王羲之の行書を加えて比較するという即物的な方法を通して、顔真卿が意識的に表現しようとした書表現の特徴を明らかにしてゆこうと考える。

二、『争坐位稿』、『郭氏家廟碑々陰』及び王羲之の行書との比較

本節では、前節で指摘した問題点を考慮に入れつつ、実際の比較を試みる。

〈図一〉は、左から王羲之の行書、『郭氏家廟碑々陰』、『争坐位稿』に共通する字をならべたものである。特に、『争坐位稿』はその特徴によって、

A 王羲之の行書に非常に近似しているもの

B 王羲之を基にはしているが、やや異なるもの

C 王羲之とは全く異なるもの

の大きく三種に分類してならべてある。また、王羲之の行書は様々な作品から集字したが、それぞれについて図版中に出典を示すことはせず、以下の考証の中で指摘するにとどめる。

「横」現在の体とは異なって、王羲之（『興福寺断碑』）

『郭氏家廟碑々陰』は偏が異なって書かれているけれども、この三作品の線質・結構が非常に酷似することは、この一例からも明かであろう。顔真卿が王羲之を基礎に据えており、『争坐位稿』の八割以上が王羲之の字に非常によく似ているとする杉村氏の主張を裏付ける例である。

「安」『郭氏家廟碑々陰』と『争坐位稿』では崩し方に差があり、『争坐位稿』の第一画の入り方もやや異なるが、ややつぶれたような形の「女」の部分など非常によく似ており、これも顔真卿が王羲之（『瞻近帖』）を基にしている例である。

〈図二〉



「争坐位稿」



「蘭亭叙」

なお、『争坐位稿』が王羲之を基にしている例は、このような一字一字のみにとどまらない。〈図二〉は、王羲之の『蘭亭叙』と顔真卿の『争坐位稿』を比較したものであるが、ここでは単に「之」「會」が似るだけでなく、「會」を左に傾けて布置しようとする点まで類似している。

「長」この場合でも、王羲之（『集王聖教序』）・『郭氏家廟碑々陰』・『争坐位稿』（A）の三作品が、非常に共通する書風であることが明かとなる。しかし、その一方で、『争坐位稿』の中にはBのように字自体は十分にしまっているが、縦画がやや右に傾いた例があり、これは、本稿で比較した作品の中では『争坐位稿』の一部にしか見られない特徴である。

「興」『郭氏家廟碑々陰』はかなり楷書に近く、表現がきっちりしているが、それでも上半分を非常に縦長に作り、しかも胴の部分をつめる「背勢」に作る所などは、非常に王羲之の行書（『蘭亭叙』）によく似ている。これに対して、『争坐位稿』のBは上述の「長」と同様に右に傾く特徴を示し、さらに字の上半分は『郭氏家廟碑々陰』と異なり、やや中太りに作っている。線こそ細いが、顔真卿の特徴とされる「向勢」である。Cは更に右に傾く特徴が顕著になって完全に体が崩れてしまっており、これも『争坐位稿』にのみ見られる特徴である。

また、『争坐位稿』のBは、特に上半分を非常に筆を旋回させて書いている点の特徴的で、おそらく「一筆書（全ての点画を一筆でかこうとする雑体書の技法）」に近い書法であろうと思われる。同じ部分が顔真卿の『祭姪文稿』の「霽」（図三）の上半分にあるけれども、『祭姪文稿』と『争坐位稿』の書の内容は全く異なり、『祭姪文稿』が細いながらも非常に力強く躍動感が溢れているのに対して、この『争坐位稿』のBは弱々しくその筆路さえあまり判然としない。前節で述べたように、飯島氏が指摘した^①『争坐位稿』の刻本の限界を感じさせる一例である。

〈図三〉



「祭姪文稿」

「得」『郭氏家廟碑々陰』には用例がないが、王羲之（『蘭亭叙』）と『争坐位稿』のAは、『争坐位稿』の方が「日」がやや平たく、「寸」の縦画がやや湾曲する点を除けば非常によく似ている。しかし、同じ『争坐位稿』でもBになると、この王羲之と異なる部分が更に強調され、偏と旁も離れている。Cになると全く王羲之からは離れ、これまで一般に『争坐位稿』の特徴のようにイメージづ

けられてきた非常に力強く太い線が現れている。

「僕」「郭氏家廟碑々陰」はほとんど楷書同然で、人偏の始筆にやや意図的な表現が見られ、その上、王羲之の「興福寺断碑」とは書いている体が異なるために、直接の比較にはならないが、それでも横画が右上がりに書かれている点などは、王羲之・「郭氏家廟碑々陰」・「争坐位稿」のAの三書に共通している。しかし、「争坐位稿」にはこれと異なる特徴を持つものもあり、Aでは体がやや左に傾いているのに対して、Bでは偏と旁の緊密度が薄くなり、Cになると旁が右に傾き、完全に崩れたようになるという、これまで指摘してきたと同じ「争坐位稿」独特の特徴が現れる。

「國」王羲之（『集王聖教序』）と「郭氏家廟碑々陰」とでは、後者の方が楷書的に書かれているが、それでもかなり王羲之を意識して書いているように感じられる。「争坐位稿」にこれと似た用例はない。Bは細いながら、比較的大きく旋回した線を持ち、さらにCではそれが太くなつて非常に力強い。

以上七例を検討した結果をまとめれば以下のようなになるう。

(1)「争坐位稿」は確かに王羲之の影響を強く受けているが、一部には「争坐位稿」だけにしか現れない以下のような特徴がある。

- ・字が中太り（「向勢」）で、線が非常に力強い。
- ・非常に強く筆を旋回させる。
- ・偏と旁が離れて緊密な関係が失われている。
- ・字形が崩れて右に傾く。

(2)これに対して、「郭氏家廟碑々陰」は非常に王羲之の行書に酷似したものがほとんどで、「争坐位稿」に見られたような独特の特徴がほとんどない。

三、顔真卿の行書における制作意図

第二節の検討の結果を、第一節で述べた視点から改めて考察すれば、以下のようなになる。

「争坐位稿」に王羲之の行書の影響が濃厚に現れていることは、既に杉村氏が指摘した通りであり、そのことは本稿においても確かめられたが、その一方で、「争坐位稿」には王羲之の行書には見られない特徴が数多くみられた。字を中太りに作る、強く筆を旋回させる、偏と旁の緊密性が薄い、字形が崩れて右に傾く、などの特徴がそれである。しかも、この特徴が、王羲之だけでなく「郭氏家廟碑々陰」にも全く見られないという点が非常に重要である。なぜなら、「草稿」である「争坐位稿」に見られて、「完成」作品である「郭氏家廟碑々陰」に見られないこの特徴こそ、顔真卿の平生の書の特徴であり、いわば顔真卿の「癖」とい

うことになるからである。

これまで、我々は、この「癖」の部分、中でも字が中太りで、線が非常に力強いという点に、『争坐位稿』の書の魅力を感じてきた。しかし、顔真卿が意識的に表現しようとした『郭氏家廟碑々陰』に、この「癖」が全く表現されず、王羲之に寄り添った表現ばかりが現れるという事実は、顔真卿自身は自分の「癖」を余り美しいものと感じていなかったではあるまいか。確かに、初唐における楷書の芸術的完成の時期を経過している上に、石に刻まれることを前提として「完成」された作品だけに、『郭氏家廟碑々陰』は、『争坐位稿』とは全く異なる確固とした構成力と装飾的な部分を持つ表現となっているけれども、人に見せようとして表現した場合に、この時期の顔真卿に意識されたのは、あくまで王羲之だったのではないかと思われる。

ここで改めて指摘しておかなければならないことは、この顔真卿の「癖」の中の、特に偏と旁の緊密性が薄れ、字体が崩れて右に傾くようになるという特徴が、後の顔真卿の楷書にも現れる、ということである。筆者は、拙稿「顔真卿書『殷夫人顔君碑』⁽¹²⁾について——顔真卿の晩年の書風に関する一考察——」において、顔真卿の楷書を大きく四十代・五十代・六十歳以降の三期に分類し、特に六十歳以降を顔書の衰退期ととらえて、その特徴が偏と旁の緊密性が薄れ字体が右に傾くことにある、と指摘した。

前稿の結論と本稿の結論とをあわせて考えれば、顔真卿の書の展開は以下のようなになるだろう。つまり、顔真卿は、平生は偏と旁の緊密性がやや薄く、字体がやや右に傾く「癖」を持っていたけれども、石碑などに楷書で表現しようとする際には、強く意識を働かせてその「癖」を隠し、行書を書く際にはさらに王羲之を目標に据えて表現していた。特に、四十代ではまだその意識が先行し、時として持つて回ったような濃厚な表現が現れるが、五十代では表面的な華やかさはやや薄れ、変わってより内容の充実した書に変貌する。このために、この時期の「草稿」である『争坐位稿』にのみ「癖」が現れ、『郭氏家廟碑々陰』には全く現れない。しかし、六十歳以降になると、書を書く際の緊張感が急激に薄れ、石碑に楷書を書く際にも、偏と旁の緊密性が薄くやや字形の崩れて右に傾く「癖」が前面に現れてくるようになった、と。

四、『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』に対する後世の評価

前節までの考察によって、『争坐位稿』に現れた独特の特徴は、顔真卿が意識的に表現しようとしたものではなく、この時期の顔真卿はあくまで王羲之を指向していたということを明らかにした。

もとより、本稿は、『争坐位稿』に価値がないと主張するつもりは毛頭ない。たとえ、この時の顔真卿の意識が王羲之を指向するものであったとしても、このことが『争坐位稿』の価値を減ずることにはならないだろう。作品の価値は、『完成』されているかどうかで左右されるものではないし、その判断はあくまで鑑賞者に委ねられているからである。事実、顔真卿が意識的に求めていたものや作品としての完成度とは裏腹に、『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』に対する後世の評価には、大きな差が現れた。

本稿の末尾の「付表」は、『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』に関する民国期までの主な著録の一覧表である。『争坐位稿』の著録の一部には、『秋澗先生大全集』や『石渠宝笈』のように、後人が『争坐位稿』を臨書した作品に対する著録も含まれているが、それにしても『争坐位稿』に対する人々の関心の高さが窺える。

すでに多くの先学が指摘する通り、顔真卿の書は、北宋初期まではほとんど評価されていなかったが、北宋後期に入ると、急激に高く評価されるようになった。その評価は、蘇軾（一〇三六—一一〇一）の場合について福永光司氏がすでに指摘した通り、「技法の巧拙よりもそこに表現されている作者の人格を問題にし、作者の人格を問題とするが故に強烈な個性と独自の創意を第一義的な価値と」していたのであり、このような書と人格を結びつけようとする見

方は、黄庭堅（一一〇四—一一一五）や米芾（一一〇五—一一一七）の場合も同様である。そして、この時期の人々が顔真卿の書として具体的に高く評価していたのは楷書ではなく、むしろ行書、なかんずく『争坐位稿』をはじめとする「草稿」であった。蘇軾は「題魯公書草」（『東坡題跋』卷四）において次のように述べる。

比公他書、尤爲奇特。信手自然、動有姿態。乃知、瓦注賢於黄金、雖公猶未免也。

「顔真卿の他の書と比べてみるととりわけすばらしい。手に任せて自然であり、動きに美しい趣がある。『瓦で賭をする方が黄金を賭けるよりうまくゆく』（『莊子』「達生」）ということとは顔真卿にも当てはまることかわかる。」

ここで蘇軾は、『争坐位稿』が単に他の顔真卿の書より美しいと述べるだけでなく、無心に書かれた「草稿」だからこそ、改まって書かれたものより優れていると評価している。そして、無心に書かれていることを評価するのは、何よりもそこに顔真卿の人格が現れていると考えたからに他ならない。

ところが、明代になると、この「草稿」を重視する意識に変化がみられる。明代中期、一五二一年までには刊行されたと思われる、都穆の『金薤琳琅』卷十一の「唐顔魯公与郭僕射書」には次のようにある。

世人重公名節、故併重其書。重其書故、草草之筆亦摹刻之。

へ世の人々は、顔真卿の名節を重んじており、だからその書を大事にする。その書を大事にするから、草卒の間に書かれたものまでも石に刻むのである。〳

ここでは、すでに人々の顔真卿の人間像に対する評価が確定しており、その評価が書に与える影響が決定的であったことが示されている。そして、何よりも重要なのは、楷書をはじめとする作品がまず尊重されており、宋代と異なつて、顔真卿の書全体の評価が非常に高まっている状況が窺えるということである。

すでに、飯島太千雄氏が指摘したように¹⁴、のちに顔真卿の楷書の書風は大きく歪められて定着した。そして、そのイメージの一部、字が中太りで力強いというイメージは、本稿の第二節で指摘した『争坐位稿』の中に存在する顔真卿の「癖」であつた。この楷書の変形の原因は、本稿では十分に明らかにし得ないが、書に人格を見出そうとするこの時代の意識を背景に、まず『争坐位稿』をはじめとする「草稿」が強く意識され、顔真卿自身の評価の定着とともに、その意識が次第に楷書へと影響していったということも、原因の一つとして考えられるのではないだろうか。

宋代において、書を人格や個性の表出と捉えようとする傾向が強かったとすれば、王羲之を強く意識する『郭氏家

廟碑々陰」の評価が高まらないのは、むしろ当然だろう。事実、宋代に書かれた著録はほとんど無い。後に『郭氏家廟碑々陰』は、顔真卿の署名がないことも手伝つて、黄本驥のように、顔真卿の書ではないという説¹⁵すら出たほどである。この点については、前述した外山軍治氏の「争坐位稿」との類似性による論証¹⁶と、飯島太千雄氏の「臧懷恪碑」と「八関斎会報徳記」の題記との類似性による論証¹⁷によつて、顔真卿の書と立証されたものと考えられるが、本稿の第二節における、「争坐位稿」・「郭氏家廟碑々陰」・王羲之の行書の類似性の検討は、外山氏の結論をさらに敷衍するものとなるはずである。

五、「草稿」から「傑作」へ

前節において、「争坐位稿」は、その「草稿」という特質が顔真卿の人間性の評価と相まつて、その評価を高めていったこと、これに対して『郭氏家廟碑々陰』はほとんど大きな注目を浴びていなかったことを指摘した。

それにしても、期せずして世に残つた「草稿」が、かくも高い評価を得たということは、改めて書の難しさを物語る。すでに前述の拙稿「顔真卿書『殷夫人顔君碑』について」¹⁸において指摘したように、顔真卿の五十代は最も充実した時期である。今回取り上げた『郭氏家廟碑々陰』の

碑陽である『郭氏家廟碑』とこの数年後に書かれた『顔勤礼碑』（五十八〜六十歳）は、顔真卿の楷書の中でも最もすぐれたものである。しかし、この時期の顔真卿をもつてしても、なお「完成」された『郭氏家廟碑々陰』よりも、『草稿』の『争坐位稿』の方がすぐれていると評価されたのである。前節で引用した蘇軾が述べたように、書を書く際にいわば「無心」になっていることがいかに難しく、かつ重要であると考えられてきたかということをも改めて思わせる。

そして、『争坐位稿』という「草稿」が後に書の「傑作」とされた事実、さらに、我々に書作品というものの自体の概念規定や鑑賞者の側の創出力の検討を迫るものと思われる。

顔真卿には、この『争坐位稿』の他に、『祭姪文稿』『祭伯文稿』の二つの「草稿」があり、あわせて「三稿」と呼ばれて尊重されているけれども、他の二つに比べると、『争坐位稿』は作品としての様相をやや異にする。

ア、『祭姪文稿』が約二五〇字、『祭伯文稿』が約三八〇字であるのに対して、『争坐位稿』は約一二〇〇字で極端に長文である。

イ、『三稿』はいずれも縦の長さのほぼ等しい紙に書かれたのではないかと思われるが、縦一行の字数は『争坐位稿』が最も多く、そのために、推敲前の最

初に書かれたと思われる字でも、『争坐位稿』の字は他の二者に比べて小さい。

ウ、字の大きさから比較するならば、『争坐位稿』は他の二者に比べて、最初にとれた行間が広い¹⁹⁾。

これらの事実は、現存する『祭姪文稿』『祭伯文稿』を顔真卿が書いた際には、その全体をおおよそ把握して書いているのに対して、『争坐位稿』を書いた際には、顔真卿自身もその全体を十分に把握しておらず、はじめから訂正・加筆が多くなることを予想していたことを示している。いまだ真偽の判断は十分なされていないし、『争坐位稿』とは時期も異なるが、顔真卿の書簡とされる『与蔡明遠帖』などが、やはり『争坐位稿』より字が大きいということを考えあわせれば、おそらく、この『争坐位稿』が清書された際には、一行の字数や字の大きさなどは大きく変化し、その結果、書表現自体も全く違ったものになったのではあるまいか。つまり、現存する『争坐位稿』は書としての草稿ではなく、文章の草稿であり、そこで用いられた用具が単に筆であったということである。

近年、筆跡による性格判断を目指す「筆跡性格学」においては、すでに人間の性格と無意識に書かれた筆跡の間の一定の関連性が指摘されている。²⁰⁾「書は人なり」という言葉に象徴される、書に筆者の人格を見出そうとする意識の一端を、理論的に裏付けけるものとして注目される。そして、

この「筆跡性格学」の成果と、『争坐位稿』が単なる文章の「草稿」であったとする前述の結論とを併せて考えるならば、『争坐位稿』の中に「忠義」をはじめとする顔真卿の人格を見出そうとし、実際にそれが出来ると考えられたのは、恐らく正しい。さらに言えば、顔真卿の書において、顔真卿自身のイメージが追体験できる「草稿」（＝筆跡）が残っていたことと、前節で指摘したような、楷書作品より『争坐位稿』が先に高く評価されたこととは無関係ではあるまいと思われる。

しかし、佐々木健一氏が、

人格に密着した行為が、よくその人格性を表現するのに対して、作品が表現するのは歴史的人格性というよりも創造の主体である。創造の主体と歴史的人格性の相違は、後者がありのままの私であるのに対して、前者はその私を超えようとするものであることに存する。

と指摘する²¹ように、何気ない筆跡（行為）と作品との間には、大きな乖離が存在する。事実、何気ない行為の結露として現れた『争坐位稿』という筆跡を、「書」作品の「傑作」と見なしたのは後世の人々であり、しかも、それはあくまで『争坐位稿』が何気なく書かれている「草稿」だったからである。

『争坐位稿』のこのような状況は、交響曲において『未完成』が名作の一つと考えられているのとは、かなり様相

を異にする。なぜなら、シューベルトが『未完成』を制作した際には、彼がその時の「私」をのり超えるべく努力し、結果的に未完成に終わってしまったと考えられるのに対して、顔真卿が『争坐位稿』を書く際には、彼は文章の内容についてとはともかく、書作品としての表現については「私」をのり超えよう意識していたとは思われないからである。我々が「書」と呼ぶものに何が含まれているのか、「書」という概念がどのように形成され、そしてどのように変化してきたのか、本来「書」作品として制作されたものでないものを鑑賞者の側がどのようにして作品と見てゆくのか、等の問題を改めて考えなければならぬ。

『争坐位稿』は、我々に大きな問題を投げかけている。

おわりに

本稿は、顔真卿によって同年同月に書かれた「草稿」と「完成」作品、『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』との比較を通して、顔真卿が行書においてこの時期に意識的に求めていた表現の基本は王羲之の行書にあり、『争坐位稿』の、字を中太りに作る、強く筆を旋回させる、偏と旁の緊密性が薄い、字形が崩れて右に傾く、などの特徴は、顔真卿が意識的に求めた表現ではなかったということ、そして、『争坐位稿』は「草稿」というその性質ゆえに顔真卿の人

間像と結びついてその評価を高め、それが楷書の評価の高まりへとつながっていったこと、などを明らかにし、さらに、単なる文章の「草稿」である『争坐位稿』が書の「傑作」とされているということから、「書」という概念自体を再検討する必要があることなどを指摘した。

今後、顔真卿の行書に対する更なる考察を行わなければならないことは言うまでもないが、顔真卿の人間像がどのような形で形成されていったか、それがどのようにして人々の間に定着し、さらに書と結びついて顔真卿の書のイメージが作り上げられいったか、ということをもさらに追求してゆかなければならない。

注

(1) 西暦七六四年十一月二十八日から同年十二月二十七日。この年の冬至は十二月十七日である。

(2) 『書論』第一号、書論研究会、一九七二年、所収。

(3) 飯島太千雄編、東京美術、一九八〇年。

(4) この他、『争坐位稿』を王羲之の行書と比較した研究には、仲川恭司「顔真卿の書法と造形の原理」

『専修国文』第四十五号、専修大学国語国文学会、一九八九年九月、所収

久保田義一「争坐位稿とその書法について」

『梅花女子大学文学部紀要（国語国文学）』第二十七号、一九九二年十二月、所収

がある。

なお、筆者は拙稿「顔真卿の書の再検討——飯島太千雄氏の指摘を承けて——」（『中国——社会と文化』第五号、東大中国学会、一九九〇年六月、所収）において、顔真卿の楷書の中から『顔勤礼碑』を取り上げ、その楷書の「重心が高い」という特徴を指摘したが、前掲の仲川氏の論文にも同様の指摘がなされている。ただ、筆者は仲川氏の論文の存在を、一九九〇年五月発行の『雑誌記事索引』（国立国会図書館逐次刊行部編、国立国会図書館発行）によって知ったので、拙稿の中で言及することは出来なかった。この場を借りて、仲川氏と読者にお詫びする。ただ、仲川氏が図版に取り上げた『顔勤礼碑』の例の多くは、後人の剽改（碑文に手を入れて書風や字形を変形させてしまうこと）を受けたものである点には、問題が残る。この点については、前掲の拙稿を参照のこと。

(5) 『書道全集』第十卷（平凡社、一九五六年）及び『書道芸術』第四卷（中央公論社、一九七五年）に収められた、『争坐位稿』に対する「解題」。

(6) 米芾『宝章待訪録』『書史』などの記載。

(7) 本稿は、平成五年度広島文教女子大学国文学会大会（一九九三年九月二十五日、於広島文教女子大学大講義室）における筆者の報告を基にしているが、この特徴は、その大会の質疑において、広島文教女子大学の古川徹講師より指摘されたものである。

(8) 『顔真卿 祭姪文稿等書蹟』（飯島春敬編著「一碑一帖

中国碑法帖精華」第二十三卷、東京書蹟、一九八四年）の「解題」。

(9) 今回比較した拓本は以下の通り。

- ・ 東京国立博物館蔵本
- ・ 浙江省博物館蔵本
- ・ 書芸文化院蔵本
- ・ 三井文庫蔵本
- ・ 書道博物館蔵本
- ・ 北京市文物商店蔵本

これらの拓本の中では、浙江省博物館蔵本が宋拓の「忠義堂帖」と言われているものの中に含まれているもので、やや系統を異にする。しかし、影印状態が悪く精査に耐えない。

(10) 前掲注(2) 参照。

(11) 前掲注(8) 参照。

(12) 「書学書道史研究」創刊号、書学書道史学会、一九九一年、所収。

(13) 福永光司著「芸術論集」(吉川幸次郎・小川環樹監修「中国文明選」第十四巻、朝日新聞社、一九七一年)の中の「東坡論書」の解題。

(14) 「試論——顔書の実像」(飯島太千雄編「顔真卿大字典」東京美術、一九八五年、所収)

(15) 「顔書編年録」巻二、「顔魯公文集」巻二十三。

(16) 前掲注(5) 参照。

(17) 前掲注(14) 参照。

(18) 前掲注(12) 参照。

(19) 前掲注(7)と同じ時に、広島文教女子大学の日比野貞勝助教授より、イ・ウの特徴を理由に「争坐位稿」が草稿の草稿の可能性もあるのではないかと指摘された。この真偽は確かめ得ないが、後述する文章の草稿という筆者の結論は、この指摘から考えたものである。

(20) 榎田仁「筆跡性格学入門」金子書房、一九九二年。及び、同書の巻末に掲げられた参考文献。

(21) 「作品の哲学」東京大学出版会、一九八五年。その第八章「人格と作品」。

〈付表〉

本表は、今回筆者が集め得た『争坐位稿』と『郭氏家廟碑々陰』に関する主な著録の一覧表である。但し、種々の目録などに著録されていても、実際に見ることの出来なかつた史料は含めていないし、この他にも多くの著録があると思われるから、これはあくまで中間報告にすぎない。今後もし引き続き史料を収集し、この表を補いたいと考えている。なお、この表に限っては、誤解を避けるために出来る限り旧字体を用いる。

『争坐位稿』関連文献著録表

宋・米芾	『寶章待訪錄』卷一
宋・沈括	『夢溪筆談』卷二
宋・蘇軾	『東坡題跋』卷四
宋・黃庭堅	『豫章黃先生文集』卷二十八
宋・米芾	『書史』
宋・米芾	『海岳名言』
宋・米芾	『寶晉英光集』補遺
宋・李之儀	『姑溪居士文集』卷四十一
宋・闕名	『宣和書譜』卷三
宋・釋惠洪	『石門文字禪』卷二十七
宋・趙明誠	『金石錄』卷八、二十八
宋・葉夢得	『避暑錄話』卷下
宋・鄭樵	『金石略』卷下

宋・闕名	『寶刻類編』卷二
宋・陳思	『寶刻叢編』卷十三
宋・眞德秀	『西山先生眞文忠公文集』卷三十四
宋・魏了翁	『重校鶴山先生大全文集』卷六十二
宋・留元剛	『顏魯公年譜』
元・王惲	『秋澗先生大全集』卷七十二
元・袁桷	『清容居士集』卷四十六
明・王佐(增)	『新增格古要論』卷三
明・陳鑑	『碑藪』
明・葉盛	『菴竹堂碑目』卷三
明・吳寬	『匏翁家藏集』卷四十八
明・都穆	『金薤琳琅』卷十一
明・都穆	『寓意編』
明・盛時泰	『蒼潤軒碑跋』(玄牘記)
明・文徵明	『甫田集』卷二十一
明・文嘉	『鈴山堂書畫記』
明・王世貞	『弇州山人四部稿』卷一百三十五
明・朱存理	『趙氏鐵網珊瑚』卷四
明・張丑	『清河書畫舫』卷五上
明・趙崡	『石墨鐫華』卷三
明・陳萬言	『鉞園集』卷十三
明・安世鳳	『墨林快事』卷六
明・孫鑛	『書畫跋跋』卷二下
明・于奕正	『天下金石志』卷一、六
明・董其昌	『畫禪室隨筆』卷一

明·董其昌「容臺集」卷五
 明·汪珂玉「珊瑚網」卷二十、二十二
 清·孫承澤「庚子銷夏記」卷八
 清·林侗「來齋金石刻考略」卷中
 清·顧炎武「金石文字記」卷四
 清·卞永譽「式古堂書畫彙考」卷八
 清·王弘「砥齋題跋」
 清·侯仁朔「侯氏書品」
 清·孫岳頒等奉勅編集「佩文齋書畫譜」卷七十八
 清·楊寶「鐵函齋書跋」卷四
 清·劉青藜「金石續錄」卷三
 清·何焯「義門先生集」卷八
 清·李光燾「觀妙齋藏金石文攷略」卷十二
 清·王澐「竹雲題跋」卷四
 清·王澐「虛舟題跋」卷十
 清·蔣衡「拙存堂題跋」
 清·張照等奉勅編集「石渠寶笈」「貯御書房」卷四
 清·張照「天瓶齋書畫題跋」卷下
 清·朱楓「雍州金石記」卷八
 清·畢沅「關中金石記」卷三
 清·錢大昕「潛研堂金石文跋尾」又續卷三
 清·王杰等奉勅編集「石渠寶笈續編」「寧壽宮藏」
 卷十四、十五
 清·孫星衍「寰宇訪碑錄」卷四
 清·瞿中溶「潛研堂金石文字目錄」卷三

清·王昶「金石萃編」卷九十三
 清·王昶「春融堂集」卷四十五
 清·趙紹祖「古墨齋金石跋」卷五
 清·姚鼐「惜抱軒文集」後集卷二
 清·洪頤煊「平津讀碑記」卷七
 清·王芑孫「楊甫未定藁」卷二十五
 清·翁方綱「復初齋集」外文卷四
 清·永理「詒晉齋集」卷八
 清·阮元「學經室集」三集卷一
 清·王志沂「關中漢唐存碑跋」
 清·黃本驥「顏書編年錄」卷二
 清·郭尚先「芳堅館題跋」卷三
 清·王鯤「話雨樓碑帖目錄」卷三
 清·吳德旋「初月樓文鈔」續鈔卷四
 清·黃本驥「顏魯公文集」卷二十四
 清·張廷濟「清儀閣金石題識」卷四
 清·朱士瑞「宜祿堂收藏金石記」卷三十九
 清·高均儒「續東軒遺集」卷上
 清·李佐賢「石泉書屋類稿」卷五
 清·何紹基「東洲草堂文鈔」卷十
 清·魏錫曾「續語堂題跋」
 清·毛鳳枝「關中金石文字存逸考」卷二
 清·黃彭年「陶樓文鈔」卷十
 清·青浮山人輯「董華亭書畫錄」
 清·徐樹鈞「寶鴨齋題跋」卷下

清·楊守敬 「隣蘇老人手書題跋」
 清·楊守敬 「學書邇言」四「單帖」(一)「行草帖」
 民國·歐陽輔 「集古求真」卷八
 民國·梁啟超 「飲冰室文集」卷七十七
 民國·宋伯魯 「續修陝西通志稿」卷一百四十九
 民國·由雲龍 「定庵題跋」

「郭氏家廟碑」關連文獻著錄表

宋·歐陽棐 「集古錄目」卷八(宋·陳思「寶刻叢編」卷七、所引)

宋·趙明誠 「金石錄」卷七
 宋·鄭樵 「金石略」卷下
 宋·闕名 「寶刻類編」卷二
 明·陳鑑 「碑藪」
 明·趙崡 「石墨鐫華」卷三
 明·于奕正 「天下金石志」卷六
 清·孫承澤 「庚子銷夏記」卷六
 清·林侗 「來齋金石刻考略」卷中
 清·葉奕苞 「金石錄補」卷十五
 清·顧炎武 「金石文字記」卷四
 清·孫岳頒等奉勅編集 「佩文齋書畫譜」卷七十四
 清·楊寶 「鐵函齋書跋」卷四
 清·劉青藜 「金石續錄」卷三

清·李光暎 「觀妙齋藏金石文攷略」卷十一
 清·王澐 「虛舟題跋」卷十
 清·朱楓 「雍州金石記」卷七
 清·畢沅 「關中金石記」卷三
 清·范懋敏 「天一閣碑目」
 清·武億 「金石二跋」卷三
 清·武億 「授堂金石文字續跋」卷四
 清·孫星衍 「寰宇訪碑錄」卷四
 清·趙紹祖 「金石文鈔」卷六
 清·瞿中溶 「潛研堂金石文字目錄」卷三
 清·王昶 「金石萃編」卷九十二
 清·趙紹祖 「古墨齋金石跋」卷五
 清·洪頤煊 「平津讀碑記」卷七
 清·王志沂 「關中漢唐存碑跋」
 清·黃本驥 「顏書編年錄」卷二
 清·王鯤 「話雨樓碑帖目錄」卷三
 清·黃本驥 「顏魯公文集」卷二十三
 清·朱士瑞 「宜祿堂收藏金石記」卷三十九
 清·陸增祥 「八瓊室金石補正」卷五十九
 清·毛鳳枝 「關中金石文字存逸考」卷二
 清·方若 「校碑隨筆」
 民國·歐陽輔 「集古求真」卷五
 民國·宋伯魯 「續修陝西通志稿」卷一百四十九